

ローマ帝国の「後継者」になること

——七世紀の地中海世界とビザンツ帝国、アラブ——

小 林 功

【要約】

六三〇年代以降、アラブがビザンツ帝国の領域への侵攻を開始し、シリア・パレスティナ地域やエジプトなどが短期間にビザンツ帝国の手から奪われた。当初ビザンツ帝国の人びとは、アラビア半島からの侵略者がどのような人びとであるのか、十分に理解できていなかった。だがアラブ国家が安定し、彼らとのさまざまな形の交渉が進むにつれて、アラブがどのような人びとであるのか、ビザンツ帝国の人びとも徐々に理解していく。そしてアラブとの対峙が続く中で、自らを「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域Ⅱローマ帝国」とみなすアイデンティティも再確認されていった。一方アラブもビザンツ帝国を滅ぼすことができなかったため、「ローマ帝国の後継者」となることができなかった。そのためビザンツ帝国との併存が確定的となった七世紀末以降、独自のイスラーム文明を形成していく道を選ぶことになる。

史林 一〇二巻一号 二〇一九年一月

はじめに

七世紀、地中海世界では大きな政治的変動が進展した。それまで長期にわたって対立していたローマ・ビザンツ帝国とパルティア・ササン朝ペルシアは、七世紀初頭の最後の衝突によってともに大きく疲弊したが、そのような状況下で急速に勢力を拡大させたのが、アラビア半島西部のヒジャーズ地方を拠点としたムハンマドが率いる集団であった。ムハンマドとその支持者たちはオリエント地域やアラビア半島における一神教の伝統を受け継ぎ^①、古代末期に流行した終末論の影

響をも強く受けつつ、新たな宗教的運動をはじめていた。彼らは政治的・軍事的にも成長し、アラビア半島で着実に勢力を拡大していった。そしてムハンマドが六三二年に没する前後からシリア・パレスティナ地域、そしてイラク地域への攻撃を開始する。

この新たな勢力アラブに、ビザンツ帝国もササン朝ペルシアも敗北を重ねた。六三〇年代にはシリア・パレスティナがアラブの支配下に入り、六四〇年代までにエジプトとイラクもその後を追った。そして六五一／五二年には、ササン朝ペルシアが滅亡し、アラブは中央アジアからキレナイカ地方（現リビア東部沿岸部）にいたる地域を支配下に収める大国家に成長した。

アラブ国家の出現は、「大国家の出現」というだけにとどまらない、大きな意味を持つものであった。彼らは『クルアーン』に代表されるような信仰体系の整備に加え、新たな貨幣や度量衡、そして法制度などを徐々に整備していった。つまり彼らは、古代地中海世界やオリエンツの文明の後継者という側面も持つものの、独自の文明を新たに創造したのである。アラブ国家・イスラーム文明の出現によって、地中海世界・中近東の光景は大きく変わっていくこととなる。

アラブ国家に完全に併呑されたササン朝ペルシアとは異なり、ビザンツ帝国はシリア・パレスティナやエジプトといった重要な領域を失うものの、小アジアから南イタリア・シチリア島までを支配する国家として、八世紀以降も存続した。だが隣接する地域に自らよりもはるかに強力な国家、そして新たな文明が出現したことの影響ははかりしれない。ビザンツ帝国にとってアラブとの対峙は、自らの生き残りをかけた戦いを意味した。そしてそれとともに、生まれつつある新たな文明と対峙することでもあった。

六三〇年代、最初にアラブがシリア・パレスティナ地域に侵入してきた時期には、ビザンツ帝国の人びとは侵入者について「アラビア半島からやってきた人びと」程度の知識しかなかった^④。しかし時の経過とともに、ビザンツ帝国の人びと（およびキリスト教徒）も徐々に、彼らが何者であるのか理解を深めていくことになる。それは初期から繰り返して起きた

軍事的衝突だけでなく、人びとの移動や交渉などによってもたらされていた。さまざまな機会やチャネルを通じて得られた情報や知識を蓄積し、理解・解釈していくことによってビザンツ帝国は、アラブ国家がきわめて強大な国家であり、彼らと軍事的・政治的に対峙していくことの困難さを痛感していくことになる。

アラブに対する認識の変化は、政治的・軍事的な観点でのみ起きたのではない。アラブが自分たちキリスト教徒とは異なる信仰を持った人びとであることもまた、徐々に認識されていく。アラブが政治的・軍事的に敵対するだけでなく、宗教的にもビザンツ帝国あるいはキリスト教徒とは大きく異なる立場にある国家・集団であることが、彼らとの対峙の結果、明確になりつつあった。換言すれば、自分たちのすぐ近くに、自分たちよりもはるかに強力な軍事力を持ち、自分たちとは異なる信仰を持つ他者が存続し、共存せざるを得ないことが、ビザンツ帝国の人びとに明らかとなっていたのである。突如として出現した強力な他者。彼らが何者であるのか認識することが、ビザンツ帝国の人びとにとってきわめて大きな意味を持ったのは当然である。だがそれは同時に、「自分たちは何者か」ということを自省することをも促しただろう。ゆえに本稿では、七世紀に突如現れたアラブが、自分たちとは異なる信仰を持つ人びとであることを、ビザンツ帝国の人びとがどのように認識していったのか、まず分析する。そしてそれを踏まえて、自分たち＝ビザンツ帝国をどのように(再)認識していったのかについても、検討していく。

最初に述べたように、アラブは大国を新たに形成しただけでなく、新たな文明をも創造した。七世紀中盤は新たな文明が姿をあらわしていく初期段階といえる。したがって本稿での分析は、アラブ国家・イスラーム文明との対峙によってビザンツ帝国がどのように変化していったのか、その発端をかいまみる試みである。

① cf. 徳永里砂『イスラーム成立前の諸宗教』国書刊行会、二〇二一年。
年。 荻勇造『物語アラビアの歴史―知られざる二〇〇〇年の伝説―』
中公新書、二〇一八年。 P. Crone & M. Cook, *Hagarism: the making*

of the Islamic World, Cambridge, 1977 (以下、*Hagarism* と略)。
② S. J. Shoemaker, "The Reign of God Has Come": Eschatology and
Empire in Late Antiquity and Early Islam", *Arabica* 61-5 (2014), pp.

514-558.

③ ヒジャーズ地方を最初の拠点とし、六三〇年代以降シリア・パレスティナやイラクなどに侵入して国家を形成していった勢力・集団の信仰が、明確な教義を持ち独自の宗教＝イスラームとして整備されていくまでには、かなりの時間を要する。したがって本稿で扱う七世紀の大半の期間、「ムスリム」という自意識はまだ確立していなかった。また初期の彼らの集団にはキリスト教徒やユダヤ教徒なども多数参加していた上に、「アラブ人」というアイデンティティも確立していたわけではない。P. Webb, *Imagining the Arabs: Arab Identity and the*

一 七世紀の地中海世界とビザンツ帝国、アラブ

本章では議論の前提として、アラブが出現した七世紀の地中海世界・中近東地域がどのような状況にあったのか、概観しておく。七世紀のこの地域状況については近年急速に研究が進展しており、その結果従来の定説やクロノロジーについて、さまざまな点で修正、あるいは再検討が必要な状況となっている。本章では、かかる新たな研究状況を踏まえて述べていく。

アラブがアラビア半島外への本格的な進出を開始したのは、六三〇年代前半である。パレスティナ内陸部から徐々に北進したアラブ軍は、六三六年のヤルムーク河畔での戦いなどを通じて、六三〇年代末までにシリア・パレスティナ地域のほぼ全域を制圧した^①。アラブはエジプトには、六四〇年から本格的な侵入を開始する。そして六四一年十一月の、カルケドン派のアレクサンドリア総主教キュロスと、アラブ軍の指揮官であったアムル・ブン・アル・アースとの協定によって、ビザンツ軍は六四二年にエジプトから撤退した。アラブの勢力は六四〇年代前半にキレナイカ地方にまで達する^②。

だが六四〇年代に入ると、アラブとビザンツ帝国との戦いは膠着状態に陥った。アラブのビザンツ帝国に対する攻撃も

Rise of Islam, Edinburgh, 2016（以下、Webb (2016) と略）；フレッシ・ド・M・ドナー（後藤明監訳）『イスラームの誕生―信仰者からムスリムへ―』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）（以下、ドナー『イスラームの誕生』と略）。本稿では彼らを「アラブ」と表記するが、あくまでも便宜上の呼称である。

④ アラブの侵入・攻撃に対してビザンツ帝国が効果的な対応をとることができなかった理由の一つとして、「侵入者が何者かわからなかった」ことも挙げなければならない。

散発的であった。別稿^④でも検討した北アフリカへの攻撃は、その一例である。アラブ軍は六四七年に北アフリカを攻撃し、当時帝位を僭称していたカルタゴ総督のグレゴリオスの軍をスフェトゥラ（スベイトラ）で撃破し、グレゴリオスをも敗死させた^⑤。だがアラブはこの好機にもかかわらず北アフリカを征服せず、現地の住民から多額の貢納を得た後、エジプトに撤退している^⑥。

この時期アラブは、東方でのササン朝ペルシアとの戦いに注力していた。ササン朝ペルシアは六三八年のカーデイシーヤや六四二年のニハーヴァンドなどでアラブに大敗を喫していたが、その後もヤズドギルド三世（在位六三一―六五一―五二年）が殺されるまで、イラン高原での抵抗を続けた^⑦。そして六五一―五二年にササン朝ペルシアを滅ぼしてようやく、アラブはビザンツ帝国の滅亡を目的とした軍事行動の準備を本格化させた。ビザンツ帝国とアラブは六五一年頃に三年間の休戦協定を締結する^⑧。アラブはこの期間中に、地中海における大艦隊の構築や、東方でササン朝ペルシアとの戦いに従事していた軍勢力を西方へ転進させるなど、十分な準備をおこなった。また別稿で分析したように、アルメニアでビザンツ帝国への離反を促す工作をおこなった^⑨。

二〇世紀末まで、アラブがはじめてコンスタンティノープルを本格的に攻撃したのは六七〇年代であると考えられてきた。だが近年ではアラブ軍がコンスタンティノープルをはじめて攻撃したのは六五四年だったことが広く認められるようになってきている。この攻撃は暴風雨によって失敗し、その後六五六年からアラブでは第一次内戦が勃発する。だがムアーウィヤ（在位六六一―六八〇年）が単独のカリフとなると、彼は再び、ビザンツ帝国の攻略・併吞をめざして連年のようにビザンツ領への攻撃をおこなった。その頂点となったのが、ムアーウィヤの息子で後にカリフとなるヤジードの指揮下におそらく六六七―六六九年におこなわれた、二回目のコンスタンティノープル攻撃であった^⑪。

だが六七〇年代に入ると、一転してビザンツ帝国が反撃に転じる。六七四年に小アジア南部沖でアラブ艦隊に勝利したのをはじめとして、シリアに対する攻撃などもおこなわれた^⑫。ムアーウィヤが没した六八〇年以降、戦いは小康状態とな

り、おそらく六八五年に休戦協定が結ばれた。^⑭ 六八〇年代にはアラブで第二次内戦が起きるため、アラブの攻撃は再び停滞するが、六九〇年代以降、混乱を収拾したアブド・アル・マリク（在位六八五―七〇五年）とワリード一世（在位七〇五―七一五年）の治世に、ビザンツ帝国へのアラブの攻撃は再び激化した。ビザンツ帝国は七一〇年代初頭までに北アフリカやキリキア地方（小アジア半島南東部）、上部メソポタミアなどを失った。^⑮ そして七一七―七一八年に、三回目のコンスタンティノープル攻撃がおこなわれることとなる。

- ① シリア・パレスティナ地域のアラブによる征服について W. E. Kaegi, *Byzantium and the early Islamic conquests*, Cambridge, 1992. なお、決定的な敗北は六三六年ではなく、六三八年に起きたアムス・ジャムク。D. Woods, "Jews, Rats, and the Battle of Yarmuk", in: A. S. Lewin & P. Pellegrini (eds.), *The Late Roman Army in the Near East from Diocletian to the Arab Conquest: Proceedings of a Colloquium Held at Potenza, Acerenza and Matera, Italy (May 2005)*, Oxford, 2016, pp. 367-376.
- ② アラブのユビント攻撃について W. E. Kaegi, "Egypt on the eve of the Muslim conquest", in: C. F. Petty (ed.), *The Cambridge History of Egypt vol. 1: Islamic Egypt, 640-1517*, Cambridge, 1998, pp. 34-61; Ph. Booth, "The Muslim conquest of Egypt reconsidered", *Tyranus et Memoires* 17 (2013), pp. 639-670.
- ③ 拙稿「北アフリカとビザンツ帝国」井上浩一・根津由喜夫（編）『ビザンツ 交流と共生の千年帝国』昭和堂、二〇一三年、四七―七〇頁（以下「拙稿「北アフリカ」と略」）、六〇―六一頁、V. Christides, *Byzantine Libya and the March of the Arabs towards the West of North Africa*, Oxford, 2000, pp. 38-39.
- ④ 拙稿「北アフリカ」。
- ⑤ Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig, 1883（以下「Theophanes ヲ略」）、p. 343.
- ⑥ Theophanes, p. 343.
- ⑦ P. Pourshariati, *Decline and Fall of the Sasanian Empire: The Sasanian-Parthian Confederacy and the Arab Conquest of Iran*, London, 2008, pp. 240-281.
- ⑧ 上の休戦協定については、第三章で触れる。
- ⑨ 拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝―コンスタンティヌス二世とアルメニア―」服部良久（編）『コンスタンティヌスから読む中近世ヨーロッパ―紛争と秩序のタビストリー―』ミネルヴァ書房、二〇一五年、一〇八―一二八頁（以下「拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝」と略」）、一三七頁。
- ⑩ R. W. Thomson (tr.), *The Armenian History attributed to Sebeos Part I. Translation and Notes*, Liverpool, 1999（以下「Sebeos ヲ略」）、ch. 50 (pp. 144-146).
- ⑪ 六七〇年代にコンスタンティノープル攻撃・包囲がおこなわれたとする従来の説には「強い疑念が呈されるようになった」とする。M. Jankowiak, "The First Arab Siege of Constantinople", *Tyranus et Memoires* 17 (2013), pp. 257-320.

¹²⁾ Theophanes, p. 354; R. G. Hoyland (tr.), *Theophanes of Edessa's Chronicle and the Circulation of Historical Knowledge in Late Antiquity and Early Islam*, Liverpool, 2011, pp. 166-168.

¹³⁾ M. Jankowiak, *op. cit.*, p. 274.

¹⁴⁾ それより早く、ムアーウィヤの生前に休戦協定が結ばれたとする『テオファネス年代記』の記述 (Theophanes, pp. 355-356) を、ヤン・コヴィアクは否定している。M. Jankowiak, *op. cit.*, pp. 255-256.

¹⁵⁾ 北アフリカでは六九八年にカルタゴを喪失した後、最後の拠点とな

っていたセプテム（現在のセウタ）を七一〇年に失った。拙稿「北アフリカ」小アジア東部・上部メソポタミアでは、フィリッピコス帝（在位七一一年―七二三年）時代に属州第四アルメニアに支配が及んでいたことが『テオファネス年代記』からわかるほか (Theophanes, p. 382)、後述するケニコス・コンメルキアリオスの印章からも、七一〇年代初頭までキリキアや第四アルメニアで徴税がおこなわれていたことが示唆される。F. Montinaro, "Les premiers commerçants byzantins", *Traux et Mémoires* 17 (2013), pp. 351-358, pp. 494, 498-499.

二 「サラケノイ」へのまなざし

はじめに述べたように六三〇年代には、ビザンツ帝国の人びとには「アラビア半島からやってきた侵入者」としか、アラブを認識することができなかった。そのためビザンツ帝国の人びとは彼らのことを「サラケノイ（サラセン人）」と呼んだ。サラケノイは、古代末期にアラビア半島やシリア・パレスティナ地域の内陸部に住んでいた人びとのことを指す呼称である。^①より古い時期にしばしば使われていた「アラボイ（アラブ人）」という呼称は、古代末期になると自称としても他称としても使われることがほぼ途絶し、サラケノイがシナイ半島やヒジャーズ地方北西部に居住・生活している人びとに対する名称として広く使用されるようになっていた。^②そのため、六世紀にビザンツ帝国の同盟者として現れるジャフナ家（いわゆるガッサン朝）^③に代表される、アラビア半島北部からパレスティナ内陸部に居住していたアラブ系の集団もまた、サラケノイと呼ばれていた。^④

サラケノイは聖書で言及されないもので、彼らがどのような人びとであるか、古代末期の人びとには容易な定義ができなかった。そのためサラケノイを「アガレノイ（ハガルの子孫）」「イスマエリタイ（イシュマエルの子孫）」と同一視するようになっていった。例えば三七〇年代にサラミスのエピファニオスが著した『パナリオン』には、以下のような記述がある。

彼（アブラハム）には八人の子がいたが、神に忠実なる生活をしていた父の意向によって、そして父に示された神の約束によって、イサクだけが後継者となった。

（アブラハムは）彼より先に、若い女奴隷のハガルからイシュマエルをもうけ、またケトラが彼に六人の子を産んだ。彼らは幸福なるアラビア（アラビア・フェリクス）という地に散らばった―ゼンブラン（ジムラン）、イエザン（ヨクシャーン）、イエスボク（イシュバク）、ソーウェ（シユア）、エマデム（メダン）、そしてマディアム（ミディアン）である―。そして「女奴隷の子」（上述したように、彼の名はイシュマエルである）は、やってきて荒野の中にあるバランという地を創建した。彼には一二人の子がいて、そこからアガレノイとイスマエリタイの諸部族―彼らは今ではサラケノイと呼ばれている―が誕生した。^⑤

また同時期にはヒエロニムスも、サラケノイとアガレノイ、イスマエリタイを同一視している。^⑥

ただこれらの議論は、サラケノイがどのような人びとであるのか、聖書の記述に沿うように定義しただけであり、彼らがハガルとイシュマエルの子孫である、という以上の強い宗教的な含意はなかった。実際古代末期にはジャフナ家のようにキリスト教を受容・信仰しているサラケノイも数多くいた。したがってアラブの拡大の初期段階において、彼らの持つ宗教的特性はあまり重視されなかった。それは、アラブに対するヘラクレイオス（在位六一〇―六四一年）の対応からも示唆される。ヘラクレイオス帝は、ササン朝ペルシアとの戦いがキリスト教徒の敵に対する聖なる戦いであることを強調した。^⑦そして実際に彼は、ペルシア領に侵入するとゾロアスター教の聖地であるシーズ（タクト・イ・スライマーン）を攻略・破壊しているし、^⑧ササン朝ペルシアに奪われてイェルサレムから持ち去られていた「聖なる十字架」の帰還を盛大に祝福すること、^⑨自らが「キリスト教徒の守護者」であることを明確に主張した。しかしヘラクレイオスは、アラブに対してはそのような行動や表象を一切示していない。

シリア・パレスティナ地域に侵入してきたサラケノイを、ビザンツ帝国の人びとはどのような存在として認識したのだ

ろうか。そのことについて伝えてくれる同時代の資料は少ないが、既にケーギ^⑩やホイランド^⑪によって調査・検討がおこなわれている。特にホイランドの研究は、ギリシア語、ラテン語による記述だけでなく、シリア語やコプト語、アルメニア語などさまざまな言語による同時代資料を広く調査した上でおこなわれている。本章では特にホイランドの分析を参考にしつつ、六三〇年代のアラブの出現期を中心に、ビザンツ帝国の人びとのアラブに対する認識を概観していく。

六三〇年代にアラブがシリア・パレスティナ地域への侵入・攻撃を開始した時期には、ビザンツ帝国の人びとにとってサラケノイはまず何をおいても、野蛮な侵入者に他ならなかった。しかし、ムハンマドやメデイナのカリフの配下に集まった人びとは、一神教の理念を抱き、実践する人びとであった。^⑫したがってシリア・パレスティナ地域に侵入してきたサラケノイが一定の宗教的傾向を持つことが、キリスト教徒やユダヤ教徒に認識されていなかったわけではない。例えば六三四年にイエルサレム総主教に就任した修道士ソフロニオスは、総主教就任時のシユノディオス^⑬で、以下のように述べている。

① 憐れみ深く人びとを愛しておられる神は、意志と同等の力をお持ちですが、あなた方が神に受け入れられるような祈りをおこなうことによって神は怒りを鎮め、長年にわたって彼ら（皇帝たち）に満足して蛮族に対する大いなる勝利や戦勝を与え、彼らの子々孫々にいたるまで帝冠をもたらし、神の平和によって守りを固め、強力な権限を渡しすべての蛮族、とりわけサラケノイを圧倒してその尊大さを打ち砕くことでしよう。しかしながら今や、我々の罪ゆえに彼ら（サラケノイ）は突如として我々に刃向かい、不敬虔なる心根と神に反する不遜さによって、残酷かつ獣のように獐猛に、すべてを荒掠しております。^⑭

六三四年には既に、イエルサレム近郊にアラブの脅威が迫っていた。同年のクリスマスの説教では、アラブ軍の存在のため、ベツレヘムなどにキリスト教徒が赴くことが困難になっていることをソフロニオスは嘆いている。^⑮そのためソフロ

ニオスはアラブがどのような集団なのか、一定の知識を持っていたに違いない。シュノディコスでソフロニオスは、サラケノイを蛮族の代表（「すべての蛮族、とりわけサラケノイ」として言及する一方で、サラケノイを「不敬虔」「神に反する」存在であるとしている。ただこの表現からは、サラケノイの宗教的傾向についてソフロニオスがどのような認識を持っていたのかはあまり明確ではない。むしろ、「我々（＝キリスト教徒）の罪」を強調することに力点が置かれている。

だが、おそらく六三七年一月におこなわれた説教の中で、ソフロニオスは以下のように語っている。この時期、シリア・パレスティナ地域におけるビザンツ支配は終焉を迎えようとしており、イエルサレムもまもなく降伏することとなる。¹⁶

②なぜ、我々にとって戦いが日常のこととなっているのでしょうか。なぜ、蛮族の侵入が繰り返されているのでしょうか。なぜ、サラケノイの軍勢は我々に攻撃をしかけてくるのでしょうか。なぜ、破壊行為や略奪行為が増大しているのでしょうか。なぜ、人びとの血が絶え間なく流されているのでしょうか。なぜ、空の鳥は人びとの体を苦しめるのでしょうか。なぜ、教会が破壊されるのでしょうか。なぜ、十字架が嘲笑されるのでしょうか。なぜ、すべての善をくださるお方であり、喜ばしきことをもたらしてくださるお方であるキリストが、異教徒の（*ἑθνηκοί*）舌によって中傷され、まったく正当にも我々に対して「おまえたちのせいでも、より重荷となることであります」。これらは、神を憎み、復讐のごとき悪事をなすサラケノイ―我々に既に預言によって知らされていたように、彼らは明らかに「荒廢をもたらず忌まわしい者」¹⁷なのですが、彼らのものではない場所に侵入し、都市を略奪し、収穫を奪い去り、村落に火をかけ、聖なる教会を焼き、神に捧げられた修道院を荒掠し、ローマ軍に対峙して戦い、戦いで勝利を宣言し、勝利につぐ勝利をあげ、我々に対してはさらに傲慢にふるまうようになってキリストや教会への中傷をさらに増長させ、神に対する邪な誹謗をおこなっているのです。彼ら、すなわち神と戦う者たち（*Θεομάχοι*）は、すべてのものを手に入れると慢心していますが、自分たちの指揮官である悪魔を常に心から模倣し、その虚無を手本としています―それは、彼（悪魔）が

天上から追放されて暗黒の暗闇の中におさまったからなのです。^⑮

この時点でもソフロニオスは六三四年と同様、サラケノイを蛮族と見なしている。だが同時にソフロニオスは、サラケノイが教会を破壊し、十字架を嘲笑し、修道院を荒掠する「異教徒」であることを指摘している。ホイランドが指摘しているように、この説教においてソフロニオスの主たる関心はアラブの存在にはないため明確には指摘しにくいものの、それでもアラブ＝「異教徒」という認識が現れつつあったことは看取できる。

ただ、このような認識が一般的になっていたわけではない。六三四年頃に成立したと考えられている『新洗礼者ヤコブの教え』には、以下のような記述がある。

③私の兄弟のアブラメスが私のところに……偽預言者が現れたこと……について手紙を書いてきたのです。『カンディダトスがサラケノイによつて殺された時、私―アブラメスの言葉です―はカイサレイア（・マリティマ）にいたのですが、船でシユカミナに立ち去りました。すると人びとがこう言っていました。『カンディダトスは殺された！我々ユダヤ人は大いなる喜びの中にいる！』そして彼らは、預言者が現れてサラケノイとともにやってきて、メシアにして救世主が来臨することを知らせている、とも言っていました。私はシユカミナにやってくると、十分な学識のある老人のところに滞在して、彼にこう言いました。『サラケノイとともに現れた預言者について、……あなたは何を言ってくださいますか？』すると彼は大声で嘆きつつ私にこう言いました。『あれは偽者だ！剣や武器を装備した預言者がやってくる、なんてことがあるだろうか？』^⑯

この報告からは、「サラケノイの中に、（偽）預言者に率いられた武装集団が出現した」という認識が当時存在したことがわかる。だがあくまでも彼らは「（偽）預言者」に率いられた集団であり、彼らが具体的にどのような信仰を持ってい

たのかは明確ではない。またユダヤ人の一部が喜んでいることから、サラケノイの信仰に対して十分な知識があったとは考えられない。実際、初期のアラブ軍はユダヤ教徒やキリスト教徒なども合流して形成された重層的な集団・軍であったから、単一の確固たる信仰を持った集団として「サラケノイ」を認識することは不可能だったろう。

またニケフォロスの『簡約歴史』が伝えている、エジプトにおけるキュロスとアムル・ブン・アル・アースとの休戦協定をめぐる交渉（六四〇年頃）についての報告も、示唆に富む。

④するとキュロスは皇帝（ヘラクレイオス）に、サラケノイのフュラルコスであるアンブロス（アムル・ブン・アル・アース）に貢納―これは通行税として徴収され、皇帝に対する徴税もこれまで通りおこなわれる―を支払う協定を結ぶつもりであると報告した。さらに、皇帝の娘の一人であるアウグスタのエウドキアを彼と婚約させ、その上で聖なる水盤で洗礼を施して（彼を）キリスト教徒にしようとした。というのもアンブロスとその軍はキュロスを信頼しており、彼を深く敬愛していたからである。²⁴

この報告で注目すべき点は二つある。第一に、キュロスはアムル・ブン・アル・アースのことを、「サラケノイのフュラルコス」と理解している。フュラルコスは六世紀にジャフナ家の君侯など、アラビア半島やシリア・パレスティナ内陸部などにいたアラブ系の部族長・君侯に対してビザンツ帝国が与えた称号である。²⁵つまりキュロスはアムル・ブン・アル・アースを、古代末期のアラブ系諸部族の部族長と同様の存在と見なしていたことがわかる。実際初期のアラブは、ジャフナ家などのアラブの部族連合体と共通する性格を持ち、またジャフナ家との衝突からアラブの征服活動が始まった可能性も考えられる。²⁶

第二にキュロスは、アムル・ブン・アル・アースや配下の軍に対して洗礼をおこなうことによって、彼らを（カルケドン派の）キリスト教徒とすることが可能と考えている。ソフロニオスと同様、アラブ軍の侵入を間近で経験し、アラブ軍

とも直接交渉をおこなっているキュロスであるが、彼はソフロニオスほど、アラブをキリスト教徒の敵とは見なししていない。^{②⑦} キュロスはアムル・ブン・アル・アースらを、洗礼を通じてカルケドン派のキリスト教徒になる可能性の高い人びとと考えており、彼らのことを「異端」と見なししていた可能性が高い。^{②⑧}

このような考え方は、ヘラクレイオス帝にも共通している。

⑤だが彼（ヘラクレイオス）は、キュロスを異端と呼んだ。それは、異端であり神と戦う者でありキリスト教徒への敵対を考えている者である、サラケノイのフュラルコスのアンプロスに、皇帝の娘を婚約させようと企んだ、という理由からだ^{②⑨}。

イスラーム信仰を「異端」と見なす言説はダマスクスのヨハネスなどの後代のキリスト教徒にも受け継がれていくが、^{③①} そのような考え方の萌芽はアラブの侵入のごく初期から存在していた。それは、サラケノイ＝アラブがキリスト教とは大きく異なる独自の信仰を持っていたとは認識していなかったということを示すものであるが、サラケノイがどのような信仰を持っているのか、十分な情報がなかった状況下では当然のことであろう。そしてまたキュロスのように、（正統な）キリスト教信仰に彼らを取り込むことが可能と考える者がいたことも、決して不思議ではない。

『新改宗者ヤコブの教え』にある、以下の記述も注目に値する。

⑥というのも、第四の野獣すなわちローマ帝国の後退の後には、諸民族の混乱を別にと、一〇の角と人びとを惑わせる潰神の悪魔の出現以外には、何も生じないに違いないからです。^{③③}

この記述は、『旧約聖書』「ダニエル書」の有名な部分を前提として書かれている。「ダニエル書」で言及される「四頭

の野獸」が世界を支配する四つの大帝国を示し、第四の野獸がローマ帝国を示す、という考え方は広く通用していた。したがってここで第四の野獸＝ローマ帝国を打破したアラブは、終末が来る直前に現れる荒廃者と見なされていることを意味する。³⁵②でソフロニオスが「ダニエル書」(および『新約聖書』「マタイによる福音書」)を援用しつつ述べている「荒廃をもたらず忌まわしい者」も、この見方を前提にしている。³⁷この時期は終末論が非常に広範に影響力を持っており、終末が近いことを当時の人びとが強く認識していたことを示す報告である³で、ユダヤ教徒の中にサラケノイの出現を喜んでいる者たちがいるのも、この文脈から理解できる。そしてこのような観点に立つならば、アラブの存在は一時的なものとして認識されていることになる。

また先述のようにソフロニオスは①で、サラケノイの出現の理由を「我々の罪」に求めているが、サラケノイの出現の理由が「我々の罪」であるならば、我々＝キリスト教徒が悔い改めることによって神の怒りは収まり、サラケノイも姿を消す。したがってソフロニオスも、サラケノイはいずれ姿を消す存在であると認識していたことが示唆される。

以上要するに、六三〇年代にアラブがシリア・パレスティナ地域への侵入を開始した時期から、ビザンツ帝国の人びとは侵入者が「サラケノイ」であると認識した。サラケノイはアラビア半島やシリア・パレスティナ内陸部にいるアラブ系の移牧民などを指す一般的用語であったから、このような認識を持つのは当然であった。一方古代末期には、サラケノイが聖書で言及されるアガレノイ、イスマエリタイと同義であるという考え方は確立していたが、サラケノイという語自体に何らかの宗教的含意があったわけではなかった。

だが侵入してきたサラケノイは、一神教の信仰を持っていた集団であった。そのためサラケノイの持つ宗教的特徴は、侵入の初期からビザンツ帝国の人びとにある程度認識されることになる。だが、それは彼らがキリスト教やユダヤ教とは異なる独自の信仰を持つ集団であるという認識が確立していたことを示すわけではない。また、彼らのことを一時的に出現した、すぐに姿を消す集団として認識することも多かった。

このような認識しか持てなかったのは、六三〇年代の状況を考えると当然であった。そもそもこの時期にはまだ、イスラームの信仰が確立していたわけではなかった。また、先述したようにメディナのカリフに従っていた人びとがすべて同一の信仰を持っていたわけではない。ホイランドらが指摘するように、ムハンマドやその後継者たちは、ムハンマドの説く信仰の信者だけでなく、ユダヤ教徒やキリスト教徒などをも一定の合意のもとで重層的な連合体としてまとめあげていた。さらに混沌とした状況に乗じて独自に軍事的行動や略奪行をおこなった集団（後代のアラビア語資料で「偽預言者」とされる人びと）もいた。そしてもちろん、ビザンツ帝国の不利を知ってメディナのカリフに寝返った集団（境域部の移牧民や、ビザンツ支配下の諸都市・軍など）もいた。^③サラケノイの信仰や宗教に対するビザンツ側の認識が漠然としているのも、この時点では当然だった。

また六三〇年代には、モレッリが指摘するようにササン朝ペルシアに対する劇的な勝利の記憶が強烈に残っていた。^④ササン朝ペルシアは六一〇年代にシリア・パレスティナ地域とエジプトを征服した。だが彼らの勢力はヘラクレイオス帝によって両地域から一掃され、シリア・パレスティナ地域でもエジプトでもビザンツ帝国の支配が復活した。同様のことが、アラブに対しても起きると考えても不思議ではない。ビザンツ帝国と長年にわたって対立を続けてきた大帝国ササン朝ペルシアですら、シリア・パレスティナ地域やエジプトを支配できたのはきわめて短期間であった。姿を現したばかりのアラブならばなおさら、その勢いがすぐに衰えると予期することは無理もない。ビザンツ帝国の人びとがアラブの急速な勢力拡大は一時的なものであり、短期間でビザンツ帝国の支配がシリア・パレスティナ地域やエジプトに復活すると考えるのも、この時期にはやむを得ないことであった。^⑤で挙げたような、キュロスとアムル・ブン・アル・アースとの交渉も、アラブの強大さが長続きしないという見通しをキュロスが持っていたと考えることで、その意図がより理解できる。

① G. Fisher et al., "Arabs and Christianity", in: G. Fisher (ed.), *Arabs and Empires before Islam*, Oxford, 2015, pp. 276-372 (以下、Fisher

et al. (2015) へ略), p. 368.

② Webb (2016), pp. 46-49; O. Nicholson (ed.), *The Oxford Dictionary*

- of Late Antiquity*, Oxford, 2018, pp. 115-117.
- ③ ジャフナ家や関連する諸問題については、最近論文集が刊行された。D. Genequand & Ch. J. Robin (eds.), *Les Jafnids: Des rois arabes au service de Byzance*, Paris, 2015.
- ④ 例えばプロコピウスは「ナスル家（いわゆるラム朝）」を「ベルミアにいるサラケノイ」「ジャフナ家を「アラビアにいるサラケノイ」と表記している。Procopius, *De bellis*, I, 47, 45-47.
- ⑤ Epiphanius, *Panarion*, IV (Retrieved from: <http://stephanus.tguci.edu/Iris/Cite?2021:002:36706> 最終閲覧日二〇二一年一月二日); Fisher et al (2015), pp. 368-369.
- ⑥ Hieronymus, *Commentarium in Ezechielem*, VIII, 25, 56. エズラニウスはサラケノイの語源をエズラノムの妻のサラに求め、サラケノイがサラの子孫を（随って）称していることをいっている。cf. G. Fowden, *Empire to Commonwealth: Consequences of monotheism in late antiquity*, Princeton, 1983, p. 147.
- ⑦ ただしエズラニウスは「十字架などの思想との差異に於いて強意な区別がある」cf. I. Stouraitis, "Just War" and "Holy War" in the Middle Ages: Rethinking Theory through the Byzantine Case-Study", *JOB* 62 (2012), pp. 227-264.
- ⑧ Sebeos, ch. 38 (p. 81); Theophanes, p. 308. 青木健『ゾラオスター教の興亡―サーサニン朝からムガル帝国へ―』刀水書房、二〇〇七年、三二―三三頁。
- ⑨ Theophanes, pp. 328-329; Nikephoros, *Patriarch of Constantinople, Short History*, Washington D.C., 1990 (以下「Nikephoros」を断る), ch. 18 (p. 66); Sebeos, ch. 41 (pp. 90-91); Ph. Booth, *Crisis of Empire: Doctrine and Dissent at the End of Late Antiquity*, Berkeley, 2014 (以下「Booth」を断る), pp. 155-160.
- ⑩ W. E. Kaegi, "Initial Byzantine Reactions to the Arab Conquest", *Church History* 38-2 (1969), pp. 139-149 (以下「Kaegi (1969)」を断る).
- ⑪ R. G. Hoyland, *Seeing Islam as Others Saw it: A Survey and Evaluation of Christian, Jewish and Zoroastrian Writings on Early Islam*, Princeton, 1997 (以下「Hoyland (1997)」を断る).
- ⑫ ヌナー「イスラームの誕生」、六八一―六八九頁。
- ⑬ 総主教就任時に、他の総主教に送付する書簡。
- ⑭ Sophronius, *Synodica*, 2, 7, 3.
- ⑮ Sophronius, *Homilia in nativitatem Christi*, in: H. Usener, "Weihnachtspredigt des Sophronios", *Rheinisches Museum für Philologie* N.F. 41 (1886), pp. 501-516, p. 507. (Retrieved from: <http://stephanus.tguci.edu/Iris/Cite?4042017:12485> 最終閲覧日二〇二一年一月二日)
- ⑯ ただしエズラニウスは「十字架などの思想」とは、ちがっている。Booth (2014), pp. 242-244.
- ⑰ *Dan*, 11: 31.
- ⑱ Sophronius, *Homilia in theophania*, X. (Retrieved from: <http://stephanus.tguci.edu/Iris/Cite?4042019:33336> 最終閲覧日二〇二一年一月二日)
- ⑲ Hoyland (1997), p. 73.
- ⑳ Hoyland (1997), p. 55, 59. しかしエズラニウスは『新洗礼者ヤコブの教え』の成立を六七〇年代と主張している。S. W. Anthony, "Muhammad, the Keys to Paradise, and the *Doctrina Iacobi*: A Late Antique Puzzle", *Der Islam* 91-2 (2014), pp. 243-265.
- ㉑ これは六三四年一月の「タトヘンの戦い」のことである。
- ㉒ *Doctrina Iacobi nuper baptisati*, in: G. Dagron and V. Deroche, "Juifs et Chrétiens dans l'Orient du VII^e siècle", *Travaux et*

Memoires 11 (1991), pp. 17-273 (『ドクトリナ・ジャコビ』, V, 16 p. 209).

³³ R. G. Hoyland, *In God's path: The Arab Conquests and the Creation of an Islamic Empire*, Oxford, 2015 (『ドクトリナ・ジャコビ』, pp. 58-59).

³⁴ Nikephoros, ch. 23 (pp. 70-72).

³⁵ cf. A. S. Lewin, "Did the Roman Empire have a military strategy and were the Jafnids part of it?", in: D. Genequand & Ch. J. Robin (eds), *op. cit.*, pp. 155-192.

³⁶ Hoyland (1997), pp. 556-558.

³⁷ ソフロニオスがカルケドン派信仰に対してわざわざ厳格な立場をとり、単一エネルギー論にも厳しい姿勢を取っていたのに対し、キエロスは単一エネルギー論の導入や非カルケドン派教会との合同を主導しており、かなり融和的な立場にある。

³⁸ 六世紀のジャフナ家の君侯や、非カルケドン派信仰の擁護者としての側面を持っており、彼らもまた「異端」と呼ぶうる存在だった。

³⁹ Fisher et al (2015), pp. 280-282.

⁴⁰ Nikephoros, ch. 26 (p. 74).

⁴¹ ただしダマスクスのヨハネスのように、アラブ支配下で生活している東方のキリスト教徒にとって、イスラーム信仰を「異端」と位置づける彼らに特有の現実的および理念的理由があったことには注意すべきである。P. Schadler, *John of Damascus and Islam: Christian*

Heresiology and the Intellectual Background to Earliest Christian-Muslim Relations, Leiden, 2018, pp. 210-212.

⁴² cf. J. Haldon, "Eastern Roman (Byzantine) Views on Islam and on Jihad, c. 900CE", in: R. Balzaretto et al. (eds), *Italy and Early Medieval Europe: Papers for Chris Wickham*, Oxford, 2018, pp. 476-485.

⁴³ キエロスの言葉は、かつてのカルペン系諸部族とローマ帝国が結んだ盟約と同様の性格を持つものであることが理解すべきである。F. Morelli, "Amr e Martina: La Reggenza di un'Imperatrice o l'Amministrazione Araba d'Egitto", *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik* 173 (2010), pp. 136-157 (『ドクトリナ・ジャコビ』, 2010, pp. 476-485).

⁴⁴ *Doctrina Jacobi*, V, 5 (p. 193).

⁴⁵ *Dan*, 7, 2-14.

⁴⁶ cf. Kaegi (1969), p. 141.

⁴⁷ *Dan*, 11: 31, *Math*, 24: 15.

⁴⁸ cf. Hoyland (1997), p. 533.

⁴⁹ ヴェンヘンツェの出現が、そのような状況を反映している。cf. S. J. Shoemaker, *op. cit.*

⁵⁰ Hoyland (2015), pp. 56-61; cf. ドナー『イスラームの誕生』, 六八―七四頁。

⁵¹ Morelli (2010), p. 147.

三 神に守られる帝国

（一）認識の変化

ビザンツ帝国やキリスト教徒のアラブに対する認識は、六五〇年代までに大きく変化した。その最大の要因は、アラブが短期間で消滅せず、国家としても安定しつつあったことである。前章で述べたように六三〇年代には、ビザンツ帝国の人びとはアラブが短期間で姿を消すと考えていた。だが次第にアラブが蛮族の武装集団ではなく、行政についての手腕をも持った人びとであることが明らかになっていく。実際、シリア・パレスティナにおいてもエジプトにおいても、現地の行政は特に大きな混乱を経験することなく、ビザンツ支配期から連続していく。それはある意味当然であった。何となれば、古代末期からアラブ人はローマ（やペルシア）の行政制度を知悉し、それに参加もしていたからである。特にアラビア半島北部のアラブ人たちはジャフナ家などを通じて、国家的な組織運営も経験していた^①。六世紀から、これらの地域でアラビア語が文章語として利用されはじめることも、このような状況を示すものである^②。

また、シリア・パレスティナ地域においてもエジプトにおいても、多くの場合征服が軍事的手段ではなく、降伏協定・和平協定によって成し遂げられたことも無視できない。そのため、征服後の政治・行政の体制も、当然ながら協定に基づく形でおこなわれる。エジプトではアムル・ブン・アル・アースは、現地の行政・軍事機構と協定を結ぶことによって、それをほぼそのまま受け継いだ^③。シリア・パレスティナ地域も状況は似たようなものだった。そして旧来から統治や行政に参加していた人びとも、大半はアラブ支配下で引き続きその任にあたることになる。ダマスクスのヨハネスの祖父や父は有名な例であるが、エジプトでも征服前後で同一人物がパガルコスを務めている例などが看取できる^④。

さらに、アラブは古代末期の行政機構を単にそのまま受け継いだわけではなく、必要に応じた改編を、征服直後からお

こなっている。シイベステインらの研究に基づいて、エジプトを例にして概観する。エジプトにおける行政機構は少なくとも七世紀末までビザンツ期のものを基本としたシステムが維持されるが、アラブ国家に特有の制度も征服直後から導入されている。例えば村落部ではコリーオン、都市部ではラウラという、新たな行政・財政上の用語が利用されるようになった^⑦。また、六五〇年頃までに人頭税（ディアグラフォン／アンドリスモス）が新たに導入された。アラビア語やヒジュラ暦を用いた文書も、早い時期（知られている最古のものは六四三年）^⑧から見られる。

要するに、古代末期から蓄積された豊富な行政経験を持つ人びとが、ビザンツ帝国（およびササン朝ペルシア）の行政機構を全体として踏襲して生まれたのが、アラブ国家であった。ホイランドが指摘するように、アラブ国家はむしろビザンツ帝国の内部からの「反乱、篡奪」によって誕生したと言える^⑩。新たに誕生した国家を統治していく能力を、アラブはかなり早い時期から示していたのであり、アラブが「早晚姿を消す」可能性は初期の段階から、かなり小さかった。

第一章で述べたように、ビザンツ帝国とアラブの戦いは六四〇年代には膠着状態となっていた。アラブの拡大は（少なくとも地中海方面については）停滞し、ビザンツ帝国もシリア・パレスティナ地域やエジプトを奪回する望みを捨てていなかった^⑪。だがアラブが短期間で姿を消す、あるいは勢力を後退させるという見通しが正しくなかったこともまた、この時期に明らかになりつつあった。そのためアラブに対する認識や、現実の政治的・軍事的対応にも、変化が不可避となっていく。

政治的な局面では第一章でも触れた、六五一年頃にビザンツ帝国がアラブと結んだ休戦協定が注目される。

⑦しかしながらコンスタンス（二世、在位六四一—六六八／六九年）帝は恐れをなし、使者を送って貢納を払い、和平を結び、神が地上に慈悲を与え給うことを期待する方が得策だと判断した。それで皇帝は使者を送って和平交渉を行った。イスマエリタイも和平を結ぶようにギリシア人に促した。だがコンスタンス帝はまだ若かったため、軍の承認なしにこの和平を実行する権威を持つ

ていなかった。それで皇帝はプロコピオスに手紙を書き、ダマスクスに赴いてイスマエリタイの指揮官のムアーウィヤと会い、軍が望む条件で和平を結ぶように命じた。それでプロコピオスは皇帝の命に従って軍の意見を聴いてからダマスクスに赴き、イスマエリタイの軍の指揮官であるムアーウィヤと会見した。彼は貢納金の額を示し、国境について議論した。プロコピオスは和平を締結し、（ダマスクスを）去った。¹²⁾

この報告では、休戦協定を結んだ直接の当事者はプロコピオスとムアーウィヤという双方の軍指揮官であるが、実際にはアラブとビザンツ帝国の国家間で結ばれた協定と理解できる。この協定の持つ意味は大きい。なぜならこの休戦協定は、ビザンツの中央政府がアラブと交わした、おそらくはじめての国家間の交渉・和約だった¹³⁾。つまりこの休戦協定はアラブが「国家」としての実体を持っていることを、六五一年頃までにビザンツ帝国が公式に認めたことを意味している。また、アラブに対して自らを明確に劣位に位置づける内容（人質、貢納金の支払い¹⁴⁾）にもなっており、アラブが自分たちよりも圧倒的な優位にあることをビザンツ帝国が認めざるを得なかったことも看取できる。アラブがすぐに姿を消す存在ではなく、永続性を持つ強力な国家であることを、ビザンツ帝国は認識したのである。

宗教的な面でもアラブに対する認識は変化していく。七世紀中盤以降の認識について教えてくれる同時代資料は乏しいが、もっとも重要なものとしてアルメニアで六六〇年代初頭に書かれたと思われる、セベオスの歴史書が挙げられる。

⑧海陸に火を放ったイスマエリタイの部隊の恐るべき悪行を描写できるものがどこにいるのだろうか？しかしながら、祝福すべきダニエルは、この地に起きる災厄を既に預言で示していた。預言者は四匹の野獣で、地上に興起する四つの王国を指し示した。（中略）南方から興隆してきたこの第四の野獣は、大天使が説明しているように、イスマエリタイの王国である――「第四の野獣、第四の王国は興隆し、（他の）すべての王国よりも強力になる。そして全地を食らい尽くす。」一〇の角、すなわち一〇人の国王が立つ。

そしてそのあとにもう一人の王が立つが、彼はそれ以前のすべてのものよりも悪辣である。」¹⁵⁾

この記述は、前章の⑥と同様、「ダニエル書」に基づいている。だが六三〇年代の⑥とは異なり、セバオスでは「第四の野獣」はローマ帝国ではなく、アラブである。そしてケーギも指摘しているように、アラブを「第四の野獣」と見なすことによって、アラブが長期にわたって存続する国家であると認識したことを示している。¹⁶⁾

同様の認識は、他の点からも確認できる。前章で触れたようにソフロニオスは①で、サラケノイが突如ローマ帝国への攻撃をおこなっている理由を「我々の罪」に求めている。つまりソフロニオスは、キリスト教徒の犯している罪に対する神の懲罰として、サラケノイが遣わされたと見なしている。このような考え方はソフロニオスに特有のものではなく、当時のキリスト教徒に広く共有されていた。例えばフランク王国で六五〇年代に書かれたと思われるフレダガリウスの『年代記』でも、ヘラクレイオス帝の軍の敗北の原因は「神の剣 (Spatha Dei)」とされているし、七世紀後半にシリアで成立したと思われる『偽メトディオスの黙示』でも、神の怒りゆえにイスマエリタイが遣わされた¹⁷⁾とされる。¹⁸⁾しかし七世紀後半には、キリスト教徒の勝利までの期間がかなり長く想定されており、ここからもアラブ国家による支配が長期化・安定化していった結果、彼らが短期間で姿を消すという見通しを修正する必要性に迫られたことが看取できる。

アラブの信仰がキリスト教徒のものとは異なるものであり、独自の宗教的慣行を持っていることも徐々に認識されるようになっていった。例えばセバオスの以下の記述は、アラブの信仰に対する認識の変化を示すものである。

⑨この頃、イシュマエルの同じ子孫たちの中にマフメットという名の商人が、あたかも神の使いであるように、真実の道についての説教者として現れた。彼はイシュマエルの子孫たちに、アブラハムの神を認めるよう説いた。それは、彼がモーセの歴史を学び、知っていたからであった。その言葉は天上からのものだったので、(彼の)命のもと、彼らはひとつの宗教の下にまとまっていった。

彼らはそれまでの無益な崇拜をやめ、彼らの祖先であるアブラハムの前に姿を現した生ける神への信仰に回帰した。それでマフメットは彼らに法を与えた―死肉を食べてはならない、飲酒してはならない、嘘をついてはならない、密通してはならない―。彼は言った。「こうした誓いによって神はアブラハムにこの地を約束し、また子孫が永遠に続くことを約束したので。神は約束したことを、イスラエルの民を愛している間は実現していた。だがあなた方もアブラハムの子孫であり、今や神はアブラハムとその子孫に約束したことをあなた方に実現しようとしておられる。アブラハムの神だけを真摯に愛せ。そして神があなた方の父祖であるアブラハムに与えたあなた方の地に進み、自らのものにせよ。戦いであなた方を遮るものは誰もいない。神はあなた方とともにあるのだから。」²⁰

ここではアラブは、ムハンマドの指導のもと、「アブラハムの神」を愛し、信仰する人びととして認識されている。ユダヤ教やキリスト教との共通性と同時に、ユダヤ教やキリスト教とは異なる性格を持つ信仰という認識が生まれていたことが、セバオスの記述から示唆される。このような認識は、ビザンツ帝国の人びとをはじめとするキリスト教徒にも共有されていただろう。²¹つまりこの記述は、アラブが自分たちとは異なる信仰を抱いていることを、キリスト教徒が六五〇年代末までに認識したことを示している。

（二）六五四年の衝撃

第一章でも述べたように、アラブによる最初のコンスタンティノープル攻撃が六五四年にあったことが認められるようになってきている。六五一年頃からの三年間の休戦期間の間、アラブは十分な準備をおこなない、コンスタンティノープルの攻略を目指した。だが攻撃は暴風雨によって大きな被害を受けた結果、失敗に終わる。

⑩この日、敬虔なるコンスタンティヌス帝の祈りが通じ、神がふりおろした一撃によって、首都は救われた。六日間にわたって強風と海の嵐が続いた。イスマエリタイは主の恐るべき一撃を目にして、肝を潰した。²⁴

アラブはコンスタンティノープルの攻略、そしてビザンツ帝国の併呑に失敗した。それまで大きな敗北や失敗を犯してこなかったアラブにとっては、これは最初の大きな失敗といえるものであった。²⁵だがビザンツ帝国にとっては、この事件は特に二つの点で、大きな意義を持つものであった。

第一の意義としては、六五四年のコンスタンティノープル攻撃は、アラブがきわめて強力な国家であることを、ビザンツ帝国に強く実感させるものとなったことが挙げられる。もちろんアラブが強力な国家であることは、六五一年頃の休戦協定からもわかるように、従来からある程度認識はされていた。だが六五四年にビザンツ帝国は、コンスタンティノープルへの大規模かつ組織的な攻撃を計画的に実行できる、自らよりも圧倒的に強力な国家が隣接し、脅威となっていることを一層強く実感することになった。そのため強力なアラブ国家に対抗して自らの存続を可能とするために、ビザンツ帝国は改革を迫られることとなった。

実際六五〇年代後半からは、さまざまな注目すべき施策が実行に移されている。その第一に挙げられるのは、小アジアの諸都市の防備の強化である。別稿で紹介したようにコンスタンティヌス二世の治世後半からペルガモンなどの小アジアの諸都市で、新たな防壁が建設されていた。²⁶アモリオンのように、古代末期からあった城壁に加えて、第二の城壁が建設された事例も確認できる。²⁷アラブの侵入に対応するためのインフラの整備が、コンスタンティヌス二世の治世後半から本格化したのである。

第二に、六五〇年代末以降、貨幣の発行量が急速に縮小した。それまで貨幣は大量発行が続き、シリア・パレスティナ地域など、かつての支配領域でもビザンツ貨幣の流通が存続していた。貨幣の発行量の縮小によって、小アジアにおける

貨幣流通が完全に姿を消したわけではないが、少なくとも旧東方領域への貨幣供給量は減少した。²⁸ この施策は、シリア・パレスティナ地域やエジプトなどのかつての支配領域がもはや自らの領域ではない（そして戻ってこない）こと、そして今後は小アジアが帝国の中核領域となる、という認識を前提としたものと考えることができる。³⁰

そして第三に、六五〇年代には軍に対する補給システムの整備が進められた。それを示すのが、ゲニコス・コンメルキアリオスである。ゲニコス・コンメルキアリオスの職務についてはさまざまな議論³¹がおこなわれてきたが、現在では印章資料の分析などに基づいた、各属州で徴収された税を軍に供給することを担当する役職に六五〇年代になったというブランドスの見解が広く認められるようになっていいる。³² こうした制度改革も、アラブに対する態勢整備の一環と見なすことができる。

六五四年の事件の持つ第二の意義は、⑨で「主の恐るべき一撃」といった表現がなされていることから示唆されるように、「神がビザンツ帝国を守護している」ということが強く意識されるようになったことである。もちろん「神に守られるローマ帝国（＝ビザンツ帝国）、コンスタンティノープル」という考え方は七世紀以前から存在していた。六二六年のアヴァール人によるコンスタンティノープル包囲の際にマリアのイコンが掲げられ、アヴァールの撤退後に「マリアに守られるコンスタンティノープル」イメージが強調されたことも、かかる意識のあらわれである。³³ しかし六五四年の事件は、さらに大きな意味を持つことになった。それは六三〇年代以来、ほぼ失敗することなく勝利・拡大を続けてきたアラブ国家の勢いを止めたことによって、神の加護がなおもビザンツ帝国にある、ということが確認できたからである。³⁵

また皇帝にとっても、六五四年の事件は大きな意味を持った。なぜならヘラクレイオス帝による単一エネルゲイア論・単意論の導入がアラブの出現とほぼ同時期だったため、皇帝の政策に対する神の怒りがアラブの勃興を引き起こしたという批判を受け、キリスト教世界の頂点としての皇帝の権威や正当性が揺らいでいたからである。コンスタンス二世も即位以来、単意論を激しく攻撃する修道士マクシモスや教皇マルティヌス一世らの言動、そして彼らに扇動された陰謀や反乱

に悩まされていた。³⁷⁾しかし六五四年のコンスタンティノール包囲の失敗は、こうした批判に対する大きな反証となった。暴風雨という奇蹟的な出来事によってアラブが大きなダメージを受けたことも相まって、非カルケドン派のセベオスすら「敬虔なるコンスタンス帝の祈りが通じ」と述べているように、コンスタンス二世には神の加護があるという考えが説得力を持つようになった。その結果、「神の加護を受けた皇帝が頂点に立つキリスト教徒共同体『ローマ帝国』という方向性が再認識され、さらに積極的に指向されることになる。³⁸⁾

コンスタンス二世は六五九―六六〇年に、コーカサス地域に遠征をおこなう。その際にコンスタンス二世は、イベリア地方の君候のジュアンセルと会見し、彼に「真の十字架」の一部を贈った。

ヘラクレイオス帝の孫のコンスタンティノス帝（Ⅱコンスタンス二世）が治世第一九年に、大量の兵と騎兵の精鋭、そしてギリシアの貴族たちとともにベルシア帝国に到着した。彼は既にこの帝国を制圧しており、また輝かしいこの世の光であるキリストの十字架を持参していた。皇帝はジュアンセルと会見するために配下の者を使者として派遣していた。それでジュアンセルは急いでメデアに赴いた。そしてジュアンセルの到着を聞いて彼と会うためにクングル村にやって来ていた皇帝のもとに姿を現した。皇帝は彼を歓待し、妻の死を理由に身に着けていた喪服を脱ぐように命じ、彼に国王の衣装をまわせた。このことに勇気づけられて、彼は皇帝に、永遠の主の十字架の一部を求めた。それで皇帝は救済の光を手にして彼の目の前でその一部を削り、この世の罪を焼き尽くすものを彼に与えてこう言った。「これがあなた自身やあなたの子たちにとって、敵の前での強固な塔になるように！」³⁹⁾

ジュアンセルとの会見は、コンスタンス二世にとつては生涯の絶頂期を示すものだったかもしれない。この時のコンスタンス二世は、カスピ海沿岸部から北アフリカにおよぶ地域を支配する、キリスト教徒の頂点に立つ存在であった。そして「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域」こそが、「ローマ帝国」であった。

六六〇年代に入ると、カリフとなったムアウィヤのもとでアラブは再びビザンツ帝国への攻勢を強め、コンスタンティノープルも再びアラブ軍の攻撃を受ける。だがコンスタンティノープルはこの時も陥落せず、六七〇年代にはビザンツ帝国が反撃に転じていった。「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域Ⅱローマ帝国」というアイデンティティは、さらなる裏付けを得たことになる。コンスタンス二世の後継者であるコンスタンティノス四世（在位六六八／六八九―六八五年）、ユスティニアノス二世（在位六八五―六九五、七〇五―七一一年）は全地公会議を開催するが、これにも「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域Ⅱローマ帝国」意識の明確化という意味があった^{④②}。

（三）小 括

当初、短期間に姿を消すと思われていたアラブであったが、現実には六四〇年代以降も拡大を続け、安定した国家へ成長していった。そのためにビザンツ帝国もキリスト教徒も、アラブに対する認識を改めていく。アラブが長期にわたって存在する勢力であり、また自分たちキリスト教徒とは異なる信仰を持つ人びとであることを、徐々に認識されていった。そして特に六五四年のコンスタンティノープル攻撃が、ビザンツ帝国に大きな衝撃を与えるものとなった。つまりビザンツ帝国にとっては、自らよりもはるかに強力な他者であるサラケノイとの併存・対峙が不可欠となったのである。そのため六五〇年代以降、ビザンツ帝国ではサラケノイに対抗していくための制度改革などが進展した。

だが六五四年のコンスタンティノープル攻撃は同時に、彼らサラケノイが無敵ではないこと、そしてビザンツ帝国や皇帝に神の加護があることを示すものでもあった。「神の加護を得ている皇帝が支配するキリスト教徒の共同体・地域Ⅱローマ帝国」というアイデンティティの再認識・明確化が、七世紀中盤以降進展したのである。第一章で触れたように、六五四年のアラブによるコンスタンティノープル攻撃は、近年その存在が認められるようになった事件であるが、その持つ意義や影響力はきわめて大きなものであったといえよう。

- ① Hoyland (2015), p. 25.
- ② G. Fisher, *Between Empires: Arabs, Romans, and Sasanians in Late Antiquity*, Oxford, 2011, pp. 135-138, 144-153, Z. T. Fiema et al., "Provincia Arabia Nabataea, the Emergence of Arabic as a Written Language, and Graeco-Arabica", in: G. Fisher (ed.), *op. cit.*, pp. 373-433, pp. 395-421.
- ③ キレリリが述べるように、アレクサンドロス大王やアウグストゥスとついで他のエジプト征服者たちは「エジプト征服の際にその土地を略定を結んではいない」。Morelli (2010), p. 157.
- ④ エリネスの祖父のメンヌールは、アラブ軍がダメスカスを攻撃した際、アラブ軍に通じてダメスカスを開城させた。M. Breydy (tr.), *Das Annalenwerk des Eutychios von Alexandrien: Ausgewählte Geschichten und Legenden kompliziert von Sa'id ibn Batriq um 935 A.D.*, Louvain, 1985, S. 115-117, 又のサルミートン・ブハ・メンヌールが「エリーノアヤの聖地エルツェルエル」に活動した。H. Kennedy, "Syrian Elites from Byzantium to Islam: Survival or Extinction?", in: J. Haldon (ed.), *Money, Power and Politics in Early Islamic Syria: A review of current debates*, Farnham, 2010, pp. 181-200, pp. 193-194.
- ⑤ 古代末期のエジプトに置かれたという官職「オクス／ベタヌム」は、政区画内での徴税官や裁判官など。O. Nicholson (ed.), *op. cit.* p. 1122.
- ⑥ P. M. Sijpesteijn, *Shaping a Muslim State: The World of a Mid-Eighth-Century Egyptian Official*, Oxford, 2013 (以下「Sijpesteijn (2013)」と略), p. 73.
- ⑦ Sijpesteijn (2013), p. 70.
- ⑧ J. Gascon, "De Byzance à l'Islam: les impôts en Égypte après la conquête Arabe, à propos de K. Morimoto, *The Fiscal Administration of Egypt in the Early Islamic Period*", *JESHO* 26 (1983), pp. 97-109, pp. 102-103, Sijpesteijn (2013), pp. 69-70.
- ⑨ SB (=Sammlung griechischer Urkunden aus Aegypten) VI 9576, P. Berol. 15002.
- ⑩ Hoyland (2015), p. 95.
- ⑪ 実際、六四五年にはエジプトに軍を派遣して「アレクサンドリアの一時的な奪回に成功している」。
- ⑫ Sebeos, ch. 45 (p. 112).
- ⑬ A. Kaplony, *Konstantinopel und Damaskus: Gesandtschaften und Verträge zwischen Kaisern und Kalifen 639-750: Untersuchungen zum Gewohnheits-Völkerrecht und zur interkulturellen Diplomatie*, Berlin, 1996, S. 23-32, 又 44, ついで以前にダメスカス・コンスタンティノープルの間、使者のやり取りがあった可能性はある。cf. *ibid.*, S. 19-21.
- ⑭ クラレベオス帝の甥のグレゴリオスがダメスカスに送られた。Theophanes, p. 344.
- ⑮ Sebeos, ch. 44 (pp. 105-106).
- ⑯ Kaegi (1969), pp. 146-147.
- ⑰ Fredegarus, *Chronicon*, MGH SRM, Hannover, 1888, IV, 66 (p. 154).
- ⑱ G. J. Reinink (tr.), *Die syrische Apokalypse des Pseudo-Methodius*, Louvain, 1993 (以下「Ps. Methodius」と略), XI, 3 (S. 42), 又このテキストに「指摘しているヤベド」「罪」の内容については、その中にも「難釈が存在している」。Hoyland (1997), pp. 524-525.
- ⑲ 『偽メトディオスの黙示』では「ベルシヤ」や「エジプト」、シリアなどとともに「シチリア」や「ギリシア」、「エーゲ海」など、「破壊者」「荒廃者」の被害を受けたことを述べた後、「荒廃者はさらに強力になり、その角を高く揚げられるだろ」と述べている。Ps. Methodius, XI, 8-13.

- (S. 45-48).
- ²⁰ Sebeos, ch. 42 (pp. 95-96).
- ²¹ アルメニアは非カルケドン派地域であるが、六六一年まではほぼザンシ支配下にあった。拙稿「首都を離れるビザンツ皇帝」参照。
- ²² Sebeos, ch. 48 (p. 135)。この休戦協定については「テオファネス年代記」でも報告されているが、休戦期間が二年とされている。Theophanes, p. 344。ただしマゼオスの伝える三年が正しい。
- ²³ Sebeos, ch. 50 (p. 144).
- ²⁴ Sebeos, ch. 50 (p. 146).
- ²⁵ 六五六年からのマヌブの第一次内戦の一因になったと考えられる。cf. Hoyland (2015), pp. 104-105.
- ²⁶ 拙稿「壁」が『壁』として機能するために7世紀中盤の小アジアとビザンツ帝国―『歴史等研究』九七一・二〇一八年、二五―三五頁。
- ²⁷ C. S. Lightfoot, "Amorium", in: Ph. Niewöhner (ed.), *The Archaeology of Byzantine Anatolia: From the End of Late Antiquity until the Coming of the Turks*, Oxford, pp. 333-341, p. 335; C. S. Lightfoot & E. A. Ivson (eds), *Amorium Reports 3: The Lower City Enclosure Finds Reports and Technical Studies*, Istanbul, 2012.
- ²⁸ J. Haldon, *the empire that would not die: The Paradox of Eastern Roman Survival, 640-740*, Cambridge MA, 2016 (以下「Haldon (2016)」と略)。pp. 252-255。コンスタンティヌス一世期以降の「マモリオン」の主要都市では貨幣流通が続いたと思われる。C. Morrison, "Coins", in: Ph. Niewöhner (ed.) *op. cit.*, pp. 71-81, pp. 78-79.
- ²⁹ M. Phillips, "The Import of Byzantine Coins to Syria Revisited", in: T. Goodwin (ed.), *Arab-Byzantine Coins and History: Papers presented at the Seventh Century Syrian Numismatic Round Table held at Corpus Christi College, Oxford on 10th and 11th September 2011*, London, 2012, pp. 39-72; R. G. Hoyland, "Numismatics and the History of early Islamic Syria", in: A. Oddy (ed.), *Coinage and History in the Seventh Century Near East 2: Proceedings of the 12th Seventh Century Syrian Numismatic Round Table held at Gonville and Caius College, Cambridge on 4th and 5th April 2009*, London, 2010, pp. 81-93.
- ³⁰ cf. Haldon (2016), pp. 257-258。またオビエド・アラハ側の状況（五〇年代末以降）もビザンツ帝国からの貨幣の流入を許容しなくてはならない（可能性）を想起する必要がある。M. Phillips, *op. cit.*, p. 59.
- ³¹ マニコス・コンメルキアリスに関するものはその議論をF. Montinaro, *op. cit.*
- ³² W. Brandes, *Finanzverwaltung in Krisenzeiten: Untersuchungen zur byzantinischen Administration im 6.-9. Jahrhundert*, Frankfurt a. M., 2002, S. 239-426。543 マニコス・コンメルキアリスの通称は「マニコス・コンメルキアリス comes commerciorum」で「国境線」にわたる関税を交易の商賈を呼び込むと離れはかた。ibid., S. 247-255.
- ³³ Theodorus Syncellus, *Historia brevis de obsidione Avarica Constantinopolis*, in: L. Sternbach, *Analecta Avarica*, Cracow, 1900, pp. 334-336, 17-25 (p. 334).
- ³⁴ J. D. Howard-Johnston, "The siege of Constantinople in 626", in: C. Mango & G. Dagron (eds), *Constantinople and its Hinterland*, Aldershot, 1995, pp. 131-141, p. 141; W. E. Kaegi, *Heraclius: Emperor of Byzantium*, Cambridge, 2003, pp. 139-140; P. Sarris, *Empires of Faith: The Fall of Rome to the Rise of Islam, 500-700*, Oxford, 2011, p. 254.

³⁵⁾ cf. I. Kobayashi, "By His Upraised Arm God Saved The City": Byzantine and Arab Strategy in the mid 7th century Asia Minor", in: T. Mimanikawa (ed.), *New Approaches to the Later Roman Empire*, Kyoto, 2015, pp. 147-161.

³⁶⁾ 単一エネルゲイア論が広く公にされた『セプフォス』が六三三年、『エクテシス』が六三六年の発布で、ダティンの戦い（六三四年）、アジユナダインの戦い（同）、ヤルムーク河畔の戦い（六三六年）などの一連のアラブに対する大敗北とはほぼ同時期。『エクテシス』の発布時期（六三八年ではなく六三六年）については R. Price, "General Introduction", in: R. Price (tr.), *The Acts of the Lateran Synod of 649*, Liverpool, 2014, pp. 5-108, pp. 9-11.

³⁷⁾ 皇帝に対するソフロニオスやマクシモスらの批判「およびその他の活動については」Booth (2014)で詳しく論じられている。

四 ムアーウィヤと「ローマ帝国」

六五一／五二年にササン朝ペルシアを滅亡させた後、アラブ国家は七世紀の間に六五四年、六六七―六六九年の二回にわたってコンスタンティノープルを攻撃し、ビザンツ帝国の滅亡・併呑を目指したが、その試みはいずれも失敗した。コンスタンティノープル攻略・ビザンツ帝国征服の失敗は、ジハードによる征服・拡大によって統合されていた初期のアラブ国家にとっては大きな問題であり、それゆえにビザンツ帝国征服作戦の失敗が、二回の内戦の一因にもなった^①。八世紀前半に中央アジアからイベリア半島にまで及ぶ大帝国を作ったにもかかわらず、アラブは結局ビザンツ帝国を滅ぼすことができなかっただけでなく、ビザンツ帝国に対する絶対的な優位を形成することにも、完全には成功しなかった^②。

アラブがビザンツ帝国を滅ぼすことができなかったということは、アラブ国家にとってもビザンツ帝国との併存・対峙

³⁸⁾ マクシモスらに対する処罰も、六五四年の事件によってその正当性が強くなった。cf. Booth (2014), p. 306; Haldon (2016), pp. 85-86.

³⁹⁾ この時期、当然ながら既にササン朝ペルシアは滅亡しているのべ、この「ベルシア帝国」とはジュアンセルの支配している領域を指す。

⁴⁰⁾ C. J. F. Dowsett (tr.), *The History of the Caucasian Albanians by Moses Dasdrucani*, London, 1961, II, 22 p. 118.

⁴¹⁾ コンスタンティノープル第三全地公会議（六八〇―六八一年）、トルコの公会議（六九一―九二年）。

⁴²⁾ M. Humphreys, "Images of Authority?: Imperial Patronage of Icons from Justinian II to Leo III", in: P. Sarris & M. Dal Santo & Ph. Booth (eds.), *An Age of Saints? Power, Conflict and Dissent in Early Medieval Christianity*, Leiden, 2011, pp. 150-168.

が不可避になったということ、そしてビザンツ帝国＝ローマ帝国がアラブにとつての「他者」として存続したということの意味する。そしてそれは、アラブ国家が「ローマ帝国の後継者」になることができなかった、ということでもある。ビザンツ帝国を完全に滅ぼすことができなかったため、アラブ国家はローマ帝国を自らの「過去」として独占することができなかった。後のイスラーム世界で、ササン朝ペルシアを自らの「過去」として（都合の良い部分を）利用することが可能であったことは対照的である。^③ 同時代の著名な君主にもかかわらずユスティニアヌス一世（在位五二七―五六五年）は、イスラームの時代になっても君主としての高い評価を受け続けたササン朝ペルシアのフスラヴ一世（在位五三一―五七九年）のような扱いをイスラーム世界で受けることは、ついになかった。^④

だが、このような状況だったからこそ、アラブには独自のイスラーム文明の創出が不可避になったともいえる。アラブが大帝国だけでなく、新たなイスラーム文明としての性格を強めていくのは七世紀末のアブド・アル・マリク治世以降であり、「ムスリム」としての、そして「アラブ」としてのアイデンティティが明確になるのも、七世紀末―八世紀初頭のこの時期であった。^⑤ また、シリア・パレスティナにおいてもエジプトにおいても、征服期以来続いていたローマ的・ビザンツ的な行政システムが、アブド・アル・マリクの治世以降急速にアラブ化していく。アブド・アル・マリク時代の貨幣（および度量衡）の改革は、よく知られている一例であろう。アブド・アル・マリクが六九〇年代に導入したディナール金貨は、重量の違いなども含めて、先行するビザンツ帝国とは大きく異なる制度の導入を明確に示すものであった。^⑥ また君主の肖像が排除されたデザインには、ムスリムとしてのアイデンティティが明確に表象されている。行政などの分野におけるアラビア語の利用もさらに深化していった。例えばエジプトでは、前章で触れたように七世紀末までビザンツ時代の行政制度が維持され、行政文書でもギリシア語の利用が一般的だったが、七世紀末以降はアラビア語による文書が一般化していく。^⑦ ムアーウィヤ治世には大きな政治的発言力を持っていた、ダマスクスのヨハネスの父のサルジュン・ブン・マンスールがアブド・アル・マリク時代に発言力を失っていったという、アラブの歴史書が伝えるエピソードも、か

かる状況を反映しているものといえる。^⑧このような一連の大きな変化は、ビザンツ帝国を滅ぼすことができないことが明らかになりつつあった時期と一致するが、これは偶然ではない。

ブースは、イスラームが（キリスト教と同様）アブラハム的一神教の一バージョンであるにも関わらず、キリスト教的なローマ文明と大きく異なったものになった理由として、アラブがローマ帝国だけでなくササン朝ペルシアの後継者でもあったからだと論じている。彼は、もしアラブが征服していたのがシリアやエジプトのような旧ローマ帝国領のみだったら、アラブは古代末期のゲルマン人のように、部分的にビザンツ帝国に同化していただろうと論じ、ササン朝ペルシア全体を併呑したことの文化的なインパクトの大きさを強調している。^⑨

ブースのかかる主張は、ペルシアの文化的遺産の大きさを重視する点や、ササン朝ペルシアの後継者としてアラブを位置づけるという点においては首肯できる。だがアラブをローマ帝国の後継者としても位置づけることには注意が必要である。アラブは確かに、ローマ帝国の文化的遺産を受け継いでいる。しかし結局、アラブは「ローマ帝国の後継者」にはなれなかった。むしろ後継者になれなかったからこそ、キリスト教的なローマ文明との差異を明確にしていくな必要に迫られたのである。

したがって、アラブ国家が「ローマ帝国の後継者」となる可能性が失われていなかったムアウイヤ時代までは、七世紀末以降とは大きく様相を異にする光景が現出していた。第三章で述べたように、アラブはビザンツ帝国内部からの「反乱、篡奪」によって誕生したという側面を持つ。生涯を通じてコンスタンティノープルの攻略とビザンツ帝国の併呑を目指していたムアウイヤは、このプロセスの完遂を目指していたといえよう。そしてこの「篡奪」が完遂されるのであれば、アラブ国家はビザンツ帝国やキリスト教徒との差異や独自性を強く意識する必要はない。

ムアウイヤがカリフに就任した時の状況についての『マロン派年代記』^⑩の有名な記述は、きわめて興味深い。

九七一年^⑪、コンスタンティヌス帝の治世第一八年、多くのアラブ人がイエルサレムに集まってムアーウィヤを王とした。それから彼はゴルゴタの丘に登って座した。彼はそこで祈りをおこない、ゲッセマネに赴いて祝福されたマリアの墓に行つてそこで祈りを捧げた。(中略) 同じ年の七月に、エミールたちや多くのアラブ人が集まってムアーウィヤに右手を差し出した。それから、彼の支配領域内のすべての村落や都市で彼が王として宣言されるべきこと、彼を王として歓呼すべきことが布告された^⑫。

ムアーウィヤのカリフ就任儀礼がイエルサレムでおこなわれていること、またその際にムアーウィヤがゲッセマネのマリアの墓や、キリストが磔刑にされたゴルゴタの丘を訪れていることは注目に値する。カリフ就任儀礼の先例・モデルとなっているのは、六三〇年のヘラクレイオスのイエルサレム入城と、六三七／六三八年頃のウマルのイエルサレム入城であり、マーシャムはサルジュン・ブン・マンスールがこの儀礼のプランニングにかかわっていた可能性をも指摘している^⑬。ゲッセマネやゴルゴタの丘の訪問についてマーシャムは、ムアーウィヤ配下に多数いたキリスト教徒の軍団などの支持を得るために不可欠だったと考えており、確かにそのような政治的・軍事的な意図があつたことは否定できない。だが同時にこのエピソードは、ムアーウィヤの時代にはキリスト教的、ローマ帝國的なイメージを取り込むことに、アラブが強い違和感を示してはいなかったことを示している^⑭。またブースが指摘するように、ムアーウィヤは「神の恩寵を受けた地上の支配者」という、キリスト教的ローマ皇帝のイメージを自らのものにしようにしていた。そしてキリスト教やユダヤ教に対してもアブラハム的一神教としての共通性がお強く意識され、アラブの信仰と大きく異なるものとは意識されていなかった^⑮。ムアーウィヤの時代には、キリスト教徒(やユダヤ教徒)も「信仰者(ムーミニーン)」の一部をなしていたとする、ドナーやシューマイカーの主張も、首肯できるものである^⑯。

つまりムアーウィヤは、キリスト教やユダヤ教をも含むアブラハム的一神教を信仰する人々の頂点、支配者として行動し、キリスト教徒やユダヤ教徒たちも含めて、支配をおこなおうとした。ムアーウィヤは、シリアにおけるキリスト教徒

(ヤコブ派とマロン派)の対立の調停をおこなっている。^⑮ムアーウィヤの行動は、異端をも取り込んでカルケドン派信仰で帝国をまとめようとした、ヘラクレイオス帝やアレクサンドリア総主教キュロスらの行動の延長線上にある。ムアーウィヤがめざしたアラブ国家は、「ローマ帝国の後継者」であることを強く意識したものであったと言える。

だがムアーウィヤのめざした方向性は、ついに実現することがなかった。ビザンツ帝国は「ローマ帝国の後継者」であり続け、キリスト教信仰を核としたローマ帝国アイデンティティを強く再確認・主張していった。そのためアラブにとつてローマ帝国＝ビザンツ帝国は、そしてキリスト教信仰は、「他者」として併存・対峙しなければならない存在となった。^⑯ローマ帝国の文化的遺産を独占することができなかったため、アラブは「ローマ帝国の後継者」ではない新たな道を踏み出し、新しい文明を作り出していかなければならなかったのである。

① プランキンシップは、ウマイヤ朝期までの初期のアラブ国家で起きた四回の国内の動揺(第一次内戦、第二次内戦、ウマル二世の治世、アッバース朝への交代期)のうち、第一次内戦をのぞく三回が、ビザンツ帝国に対する敗北が引きがねとなっていることを指摘している。

Kh. Y. Blankinship, *The End of the Jihād State: The Reign of Hishām Ibn ‘Abd al-Malik and the Collapse of the Umayyads*, Albany, 1994, p. 20. たが実際には、第一次内戦を含む四回の動揺すべてが、ビザンツ帝国に対する敗北の結果として起きていた。

② アラブで内戦が起きている時期のように、アラブがビザンツ帝国に貢納金を支払うなどの条件で結ばれた休戦協定もあった。

③ cf. Kh. Rezakhani, "Arab Conquests and Sasanian Iran", *History Today*, April 2017, pp. 28-36.

④ C. E. Bosworth (tr.), *The History of al-Jahārī vol. 5: The Sasanids, the Byzantines, the Lakhmids, and Yemen*, Albany, 1999, pp. 154-156 (n. 395); cf. Booth (2015), pp. 221-222. 十一世紀にセルジ

ューク朝の宰相であったニザーム・アルムルクが著した『統治の書』においても、フスラヴ一世(公正者ヌーシルヴァーン)は公正で知識ある統治者として高く評価され、何度も言及されている。ニザーム・アルムルク(井谷鋼造・稲葉稜訳)『統治の書』岩波書店、二〇一五年。

⑤ *Hagiaron*, p. 29. ヌナー『イスラームの誕生』二二〇―二二三頁、Webb (2016), p. 139.

⑥ Ch. F. Robinson, *‘Abd al-Malik*, Oxford, 2005, pp. 71-80. B. Lewis et al (eds), *The Encyclopedia of Islam New Edition vol. II*, Leiden, 1991, pp. 297-299. ヌナー『イスラームの誕生』二二五―二六頁。

⑦ Sipesteijn (2013), pp. 91-111; M. S. A. Mikhail, *From Byzantine to Islamic Egypt: Religion, Identity and Politics after the Arab Conquest*, London, 2014, pp. 106-135; cf. P. Sarris, *op. cit.*, pp. 297-302.

⑧ 若林啓史『聖像画論争とイスラーム』知泉書館、二〇〇三年、六七

一七〇頁。

- ⑨ Booth (2015), p. 230.
- ⑩ 『ペロン派年代記』に「こうは、Hoyland (1997), pp. 135-139.
- ⑪ 西暦六五九／六〇年、ただし実際には六六一年の出来事。
- ⑫ *Maronite Chronicle*, in: A. Palmer (tr.), *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles*, Liverpool, 1993, pp. 29-35, pp. 31-32; cf. A. Marsham, *Rituals of Islamic Mourning: Accession and Succession in the First Muslim Empire*, Edinburgh, 2009, pp. 86-89.
- ⑬ A. Marsham, "The Architecture of Allegiance in Early Islamic Antiquity: The Accession of Mu'āwiyā in Jerusalem, C.A. 661 CE", in: A. D. Behnamer et al. (eds), *Court Ceremonies and Rituals of Power in Byzantium and the Medieval Mediterranean: Comparative Perspectives*, Leiden, 2013, pp. 87-112 (51-52 Marsham (2013) 参照), pp. 101-103; cf. S. Bashear, "Qibla Musharriqa and early Muslim prayer in Churches", *The Muslim World* 81-3/4 (1991), pp. 267-282, 参照。
- ⑭ Marsham (2013), pp. 103-105.
- ⑮ cf. O. Heilo, *Eastern Rome and the Rise of Islam: History and prophecy*, London, 2016, pp. 39-41.
- ⑯ Booth (2015), p. 135.
- ⑰ ヌナー『イスラームの誕生』一八二—一八三頁。St. J. Shoemaker, *The Death of a Prophet: The End of Muhammad's Life and the Beginnings of Islam*, Philadelphia 2012, pp. 211-213.
- ⑱ *Maronite Chronicle*, p. 32.
- ⑲ トレーバース見たビザンツ帝国の認識に「こうは」A. M. H. Shbouh, "Byzantium and the Arabs: the Image of the Byzantines as mirrored in Arabic Literature", in: *Proceedings of the First Australian Byzantine Studies Conference*, Canberra, 1981, pp. 43-68.

おわりに

七世紀中盤以降、ビザンツ帝国は古代のローマ帝国のような、地中海周辺地域の大半を支配する国家ではなくなっていた。地中海周辺地域で最強の軍事力を保持する国家でも、地中海周辺地域でもっとも富裕な国家でもなくなっていた。そして、ローマ帝国の支配下にあった地域のうち、帝国の領域外に去ったシリア・パレスティナやエジプトにはアラブが勃興して、独自の国家と新たな文明を形成していった。かつて、地中海世界でローマ帝国が保持していた圧倒的な軍事力や経済力はいまや、勃興したアラブ国家のものとなっていた。ビザンツ帝国は、アラブという自らよりもはるかに強力な「他者」との対峙を余儀なくされ、彼らに対抗・併存していくために、さまざまな改革や変化を進めていく。その結果、七世紀初頭までとは様相を大きく異にする国家として、「ビザンツ帝国」が出現したということができよう。

一方アラブは軍事的にも経済的にも圧倒的な力を持つにいたったにもかかわらず、コンスタンティノープルの攻略に失敗し、ビザンツ帝国を滅ぼすことができなかった。そして本稿で検討したようにそれが、アラブが独自の文明を展開させていった要因でもあった。つまりアラブもまた、ビザンツ帝国という「他者」との対峙を余儀なくされ、新たな国家や文明を形成していったのである。このような観点から見るとビザンツ帝国とアラブは、敵対と衝突を繰り返し、また相互に「他者」と認識してはいるものの、実は同じ土壌から同時期に生まれ成長した、双子のような存在だったとも言える。

だが「ローマ帝国であること」を受け継ぐことができたのは、強大なアラブではなく、ビザンツ帝国であった。

七世紀中盤以降のビザンツ帝国は、かつてのローマ帝国とはさまざまな点で容貌を異にする国家へと変容していた。だがビザンツ帝国は「ローマ帝国」として、その後も長く続いていく。そしてイスラーム世界も「ローマ帝国（ルーム）」と、長きにわたって対峙を余儀なくされた。ビザンツ帝国が「ローマ帝国」として存続したことは、ビザンツ帝国自身にとっても、そしてイスラーム世界にとっても、きわめて大きな意味を持っていたと言わなければならない。

To Become the 'Heir' of the Roman Empire:
Byzantium, Arabs and the Mediterranean in the Seventh Century

by

KOBAYASHI Isao

From the 630's, the Arabs penetrated into the territory of the Byzantine Empire and occupied Syria, Palestine, and Egypt by the 640's. The Arabs also invaded the Sasanian Empire and completely annexed Sasanians in 651/52, and as a result they formed a vast and powerful empire. But the emergence and the expansion of the Arabs had another significance: the Arabs also created new Islamic civilization.

In the first phase of the Arab invasion during the 630's, the Byzantines could not fully understand the Arabs. The Arabs had been called "*Sarakenoi* (Saracens)" and identified with "*Agarenoi* (descendants of Hagar)" or "*Ishmaelitai* (descendants of Ishmael)" from Late Antiquity, but the word *Sarakenoi* (and also *Agarenoi* and *Ishmaelitai*) did not connote any religious meaning. So during the 630's, the Byzantines (and other Christians and Jews) could not understand the Arabs' faith adequately, and often regarded the Arabs as simply pagans. The Byzantines also expected that the Arabs would disappear in a short time. Because the Byzantines bore yet in mind that the Sasanians had invaded and ruled Syria and Egypt during the 610 - 620's but their rule ended abruptly due to the striking victory of Byzantine Emperor Heraclius (r. 610-641) in 628.

However, as the Arab state became stable, and knowledge of the Arabs increased, the Byzantines and Christians outside of the Byzantine Empire gradually understood that the Arab state was much more powerful than the Byzantine Empire, and that the Arabs had been developing their own faith. The first Arab attack against Constantinople in 654 is of particular importance. In 654, after the preparations of a much larger number of troops and an armada, the Arabs penetrated into the Byzantine Empire and quickly reached Constantinople. But the Arab fleets suffered considerable damage as the result of a heavy storm, and their land forces were also forced to withdraw.

This incident is important in two respects. At first, the Byzantines became more conscious of their own weakness and Arab strength. Therefore from the 650's, the Byzantines immediately began the reforms of their defenses and administration to respond to this serious situation.

Secondly, the Arabs had been defeated and withdrew because of the heavy storm. This was interpreted to mean that Byzantium and the Byzantine Emperor had received God's special providence. From the 630's, Emperor Heraclius and his grandson Constans II (r. 641-668/69) had been heavily criticized due to their monenergist and monothelete doctrines, and their critics like Maximus the Confessor asserted that the Arabs' rapid expansion and the defeat of the Byzantines had been caused by the emperor's heretical policy: Maximus and his supporters insisted that the sinful religious policy of Heraclius and Constans II had provoked God's anger. However, the "victory" in 654 proved that not only Constantinople and the Byzantine Empire but also the Emperor had been receiving God's protection. In other words, the "victory" over the Arabs in 654 proved the Emperor's religious doctrine was right.

Confrontation with the Arabs continued from 660's onwards, and the Arabs again intensified their efforts to conquer the Byzantine Empire. But the Byzantines withstood tenaciously and even began to counterattack the Arabs in the 670's. Under such circumstances, the Byzantines further reinforced the belief that the Byzantine Empire and the Emperor received God's Providence. For them, the Roman Empire meant the Christian community ruled by an Emperor for whom God provided divine protection.

On the other hand, the Arabs could not extinguish the Byzantine Empire, and they were forced to coexist with Byzantium over a long period. So, the Arabs could not become the sole 'heirs' of the Roman Empire and Roman civilization, and on account of this, they chose to form their own Islamic civilization from the end of the seventh century.

Key Words; Byzantine Empire, Islam, Constans II, Arabs, Mu'awiya